My Page

石川県地域づくり推進協議会

1998 VOL.2 MARCH

情報誌

Contents

▼巻頭特集 座談会
「NPO法(特定非営利活動促進法)成立」

▼地域レポート
「内川の自然と未来をつくる会」
「諸岡の里おこし会」
「ハート・サイド・ネットワーク」

▼交流とネットワーク
「地域づくり団体全国研修交流会 福井大会」
「地域人材養成塾・塾長サミット」

▼石川の地域づくり
「アトランダム」

花を咲かせましょう！

人を集めるためにも、花は魅力的。みんなで夢を育てたい。

特集 座談会「NPO法成立」

［特定非営利活動促進法］

３月にNPO法が成立しました。地域づくりをはじめとした市民活動を促進するための法律です。今後の地域づくりに大きな影響を与えることはたしかです。地域づくり推進協議会としても、どのように対応するかが問われています。そこで、運営委員会の部会長とコーディネーターで、法律の意義と今後の方向などについて話しあってみました。

■出席者

大湯章吉	（システム部会長／能登乃國ゆするぎ塾）
毎田雄一	（情報部会長／ワークショップIN小松）
赤須治郎	（コーディネーター／赤須企画事務所）
伊藤数子	（コーディネーター／パステルラボ）
川畑　明	（コーディネーター／ヒューマンネット）
濱　博一	（コーディネーター／アスリック）
高峰博保	（コーディネーター／グルーヴィ）

［ＮＰＯ法のメリットと課題］

高峰◆まず最初に、NPO法の地域づくり団体にとってのメリットとしてはどのようなことがありますか。

濱　◆法人格を取得できれば、事務所を借りたり、電話やコピーなどの契約も団体としてできます。資産がある場合に、相続などの問題も発生しなくなります。借り入れも可能です。社会的にも認知され、事業の継続性についての意識が高まることが期待されます。

高峰◆逆に困ることはないのでしょうか。

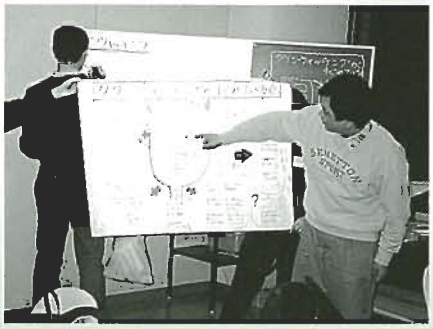
大湯◆貯金があるとか、多くの会費を集めている場合など、税務署と明確におつきあいしないといけなくなりますが、それはそれではっきりしていいともいえます。

濱　◆現段階では、税制面での優遇措置はないので、寄付や会費を集める際に問題があります。特に大がかりな事業を行うと税金の負担が予想されます。

［ＮＰＯ法の意義］

高峰◆法人化するかどうかを考えることは、組織の将来展望

●部会長・コーディネーターで行った「地域づくり講座」



ワークショップ入門講座

手づくり情報発信セミナー

について再検討するよい機会ともなります。どのような活動を長期的に展開してゆくのか、どのような成果を期待するのか、など団体としての在り方を考えることになります。

大湯◆その前に、NPOとは何か？から始めないといけない。NPO法の何たるかがまだよく分かっていないのが現状ではないか。

濱　◆NPO法が何だというと、間口が広すぎると思うんです。金沢大学の佐々木教授が言われていることが参考になります。これまでは税金を払って、国民はナショナルミニマム(国として確保する最低限のこと)を保障されている。地域では、ナショナルミニマムは横に置いておいて、NPOがこういう活動をしますから寄付をお願いしますということに対して企業や個人が金を出すようになれば、金の回り方がこれまでとは全然異なるようになる。それが広がっていくと、ローカルマキシマムがナショナルスタンダードとなり、地域から国家が変わっていく可能性が出てくると。そういう意味では税制が伴わなければ効果は薄い。それに大きな意味があるということを言われている。

大湯◆それは最終的には小さな政府を目指すことにつながる。税制も、企業寄付金も控除対象になるようにしなければ意味がない。

[法人化の意味]

濱　◆シーズの松原さんはNPOにもマーケットの理論が適用されるということを言われている。公益性があるところには金が集まるということです。

高峰◆お金がいかに集まるかも、組織の存在意義に関わる部分として重要ですよ。ドラッカー先生が『非営利組織の経営』などで盛んにいわれていることですが、非営利組織もマーケティングをしっかりする必要があります。顧客を明確に想定し、寄付を提供していただけるだけの成果を上げていくことです。

赤須◆法人格をとるかどうかは、自営業者が有限会社になるかどうかの話みたいなものです。そういう人がなぜ法人格を取得するかというと、社員も欲しいとか、事業を拡大したいという希望があって、法人格を得ていかなければならないということになるのです。そのように、発想を変えられるかということがNPO法の流れだと思うんですよ。今のところはみんな好きでやっていて、明日やめてもいい。そんな状態の人達が法人格を取得に動くかどうか。

川畑◆法人に移行する必要性を認めているところは、研究をし尽くして移行すると思うけれど、多くの団体は「気楽さ」の中で楽しんでいる。それを捨ててまで、法人に移行する団体がどれだけいるだろうか。事業計画や組織もあやふやなところが多い。

[地域づくり推進協議会の今後]

毎田◆NPOって市民セクターづくりだと思うんですよ。地域づくり推進協議会の良さは、必ずしも市民セクターだけでなく、企業や行政も参加していること、そのオープンさだと思います。意識の高い行政マンや社会貢献したいと考えている企業も参加していて、これが地域づくり推進協議会だなと感じた。現状では、地域づくり推進協議会の中でNPOという言葉に違和感があるんですよ。

川畑◆地域づくり推進協議会に参加している団体はあまりにも限られている。もっと広げて、いろんな団体に参加してもらってNPOを呼びかけるのならいいんですが、現有メンバーに呼びかけても的外れですよ。

毎田◆そもそもこの協議会に参加するメリットを感じなければ、参加しないと思いますよ。集まった時にお互いどのように質の高い情報交換が出来ているのかとか、集まることによりどのような協同がおこなえるのかが打ち出せないと輪は広がらない。

今はまだ、気軽に参加できる市民団体の気運を盛り上げていく必要もあると思うんです。地域づくり推進協議会に足りないところはそのようなこともあります。

川畑◆アメリカのNPOは顧客をもっている。たとえば、人種の問題とか、住宅の問題とか、地域の問題と、それぞれ顧客を持っている。我々に果たしてそれがあるかというと非常に曖昧なんですよね。

大湯章吉

赤須治郎

濱　博一

川畑　明

伊藤数子

毎田雄一

高峰博保

［地域づくりのマーケティング］

濱　◆マーケティングが出来ていないんですよ。顧客がはっきりしない。

川畑◆必要性を感じている団体は動いている。我々の団体が動いていないということは必要性を感じているところが少ないということか。

濱　◆協議会を説明するための販促ツールがない。新規の参加団体を集めるためには勧誘する必要があるのです。

大湯◆県内の各種団体のデータベースは無いに等しい段階なので、どこに声をかけていいかは口コミ、人ネットに頼らざるを得ない。

毎田◆先日のハーサイドネットワークとの交流を兼ねた取材の後、代表の中村さんも須戸さんも、大変よかったといわれていた。「県内にも本当に多様な人がいることがよく分かった」と。

伊藤◆これから必要なのは、もっともっと交流できる機会を沢山作って、そこにいろんな人を誘ってゆくことです。情報誌もそうだし、個々の団体が行う事業にも、他の団体のメンバーに参加してもらうことです。

［参加団体をいかに増やすか］

川畑◆今の協議会をもっと自由に参加できる雰囲気にしないといけない。参加している団体も肩身が狭いという話もある。自治体と特別な関係にあると思われて困っているとか、一部でいわれている。

赤須◆団体と市町村との関係も大切なので、参加団体の書類を市町村通しにする意義はある。

濱　◆今の仕組の中でも、どんどん増やしてゆくことが可能なはず。

川畑◆それなら一気に変えてしまえばいいんじゃないの。

濱　◆もう少しなし崩しにしてからでいいのでは……。

伊藤◆参加団体を増やすためには、年に１回新入団体獲得月間を設定すればいい。毎年１市町村１団体以上を増やしてゆくとか。参加団体からはお金を出していただいたほうが真剣になるのでは。お金を出してもらうためにはしっかりとした計画と活動、そして成果が求められます。批判も出やすくなり、活性化するのではないですか。

大湯◆現状では協議会に入っているという意識が弱いのではないか。運営委員会でもっと議論すべきではないか。このような議論を行政マンも交えて行うべきでは。

高峰◆動機づけとなる付加価値がどれだけあるかが、参加団体を増やす要因として重要です。団体の行う事業への支援がどれだけ得られるか、情報発進できるか、適当な講師を紹介してもらえるか、求める情報が簡単に入手できるか、など地域づくり団体の期待に協議会が的確に応えてゆくことです。

［交流会を頻繁に］

伊藤◆協議会としては、利用しやすいメニューを用意すること、そしていろんな団体を巻き込んでいくこと、そうすることが相互刺激になっていいのではないか。それと全体交流会みたいなものを毎年どこかでしたほうがよいかも知れませんね。

毎田◆交流会も続けることで、意義を感じた人が新しい人を連れてくることになるのではないか。

濱　◆交流会はやり続けないと意味がない。情報の共有と創造のためにも、出会いと議論が必要です。

大湯◆生きた情報はフェイス・ツー・フェイスで得られるんだよね。

濱　◆メールアドレスを持っていると情報が流れやすい。事務局もインターネットをつないでほしいね。

伊藤◆個別の団体がホームページを作るようになれば、協議会もホームページを持つべきですよ。

［コーディネーターの役割］

川畑◆今後のコーディネーターの役割を明確にしていくことも必要やね。

濱　◆コーディネーターの派遣も講演だけで終わりではつまらない。フラストレーションが溜まるんだよね。

大湯◆最初はそれでもいいんじゃない。デモンストレーションだと考えればいい。続けて何らかの相談・依頼がくる方向にもっていければ、別のコーディネーターや講師を紹介して

座談会
「NPO法成立」
［特定非営利活動促進法］

NPO
Nonprofit Organization

NPO法関連図書

『NPO基礎講座』

山岡義典編著
ぎょうせい©2,000円

NPOとは何か、NPOとボランティア、NPOと企業、NPOと行政との関係などをコンパクトに紹介している。山岡氏は日本NPOセンター常務理事。

もいいではないか。それが本当のコーディネーターのように思う。講演なら講演の後のフィードバックが必要よ。

濱　◆今後の方向性や方法がわからないところも多いので、そのような団体の場合は、とにかくとっかかりをつくることが大切です。

高峰◆子供や孫の代に向けて、何をし、何を残していけるかを考えないといけない。そのような長期的な観点での行動、実践が求められています。新しい行動への提案をしていけるかがコーディネーターに問われている。勉強会から活動へ！ですよ。

大湯◆私は“風邪”だと思っているんですよ。熱をもった菌を移して回るということが役割やと思っている。

伊藤◆コーディネーターの手伝いによって、どこまでできるかという事例を作ることも重要ではないですか。一つの団体や地域に集中的に関わることを可能にして欲しいですね。

大湯◆コーディネーターを紹介したパンフレットも作らないと、皆さんにわからないよ。

濱　◆国土庁の派遣事業もあるし、電源地域振興センターの派遣制度もある。使える制度を活用してもいい。協議会として情報を集める必要があるね。

［人も金も集まる活動を］

高峰◆今後の行政のスタンスとしては、民間サイドからいろんな新しい動きが出てきて、存在を認められるようになれば、支援するという方向に動いている。社会全体としても、頑張る個人や組織に人も金も集まるようになってきている。

濱　◆日本のNPOは、これまで便宜上、株式会社でやっていたという部分も多分にあった。日本の法人格の文化はまだ混沌としている。

大湯◆株式会社であっても、地域のために経済活動をしている場合はまさにNPOではないか。

高峰◆行政サービスについても、住民が「これだけのサービスをしてくれるのであれば、これだけの金を払いましょう」と言うのが税金にならなければならない。法人格をとるとらないに関わらず、今後の在り方について考えてみるよい機会として、NPO法の成立があるように感じられます。

ワ・ン・ポ・イ・ン・ト NPO法

①「特定非営利活動」とは？

「別表に掲げる活動で、かつ不特定かつ多数のものの利益の増進に寄与することを目的とするもの」

別表には、「保健、医療または福祉の増進」「社会教育の推進」「まちづくりの推進」「文化、芸術又はスポーツの振興」「環境の保全」「災害救援」「地域安全」「人権擁護又は平和の推進」「国際協力」「男女共同参画社会の形成」「子どもの健全育成」「団体の運営又は活動に関する連絡、助言又は援助」が挙げられている。

②法人格を取得するためには？

「特定非営利活動」を行うことを主たる目的とする団体で、宗教、政治、選挙活動を行わないこと。さらに、メンバーの条件として不当な条件を付けたりせず、報酬を受ける役員が3分の1以下であること。

③収益を目的とした事業を行えないか？

利益を構成員に分配しなければ、営利事業を行ってもよい。

④法人の所轄庁はどこか？

法人の事務所が所在する都道府県知事。2以上の都道府県に事務所を設置する場合は経済企画庁長官。

⑤「設立の認証」とは？

団体が認証の基準を満たしているときは「認証しなければならない」とされている。したがって、定められた書類等が揃っていれば法人として認められる。

⑥NPO法の施行はいつか？

政府の方針は12月1日の予定である。

⑦石川県の担当窓口は？

県民文化局県民交流課　TEL 076-223-9113

NPOの法人格取得の相談については、地域づくり推進協議会でも承ります。

『非営利組織の経営』

P.F.ドラッカー著
ダイヤモンド社●2,136円

非営利組織こそ、目標を設定し成果を上げていかなければならないと説く。アメリカでは成人の二人に一人が週当たり3時間以上はボランティア活動をしているとのこと。

『市民活動レポート』

経済企画庁国民生活局編
大蔵省印刷局●920円

1996年に全国規模で実施された「市民活動団体」についての調査結果をまとめたもの。全国の団体の状況を知る基礎資料として役に立つ。

『NPO法人ハンドブック』

シーズ＝市民活動を支える制度をつくる会○2,000円

NPO法人化を検討するための検討ポイントを網羅したブックレット。

※以上の情報はシーズのホームページを参考にさせていただいています。
[http://c-s.vcom.or.jp/]

「地域レポート」

AREA REPORT 1

内川の自然と未来をつくる会

連絡先■金沢市住吉町ホ129 〒920-1344
TEL076-241-3065(山田一二)

素敵なおばあさん達との出会い

母さんが麻糸つむぐ、一日つむぐ……と、歌にはあるけど、実際に見たことがなかった糸つむぎ、機織り。布ワークショップに参加し、目の前で糸作りを見せてもらい機織りをさせてもらった。

一見、隣近所のどこにでも居そうな気さくで陽気なおばあさん達がワークショップの先生。「私らみーんな若い頃は、こうやって糸を作ったんや」「もう50年もやっとらんから出来んわいね。今日は皆さんと一緒に勉強させてもらうわ」と謙遜しつつ、器用に左手でよりをかけながらリズミカルに糸を巻つけていく。その姿はまるでマジシャン。

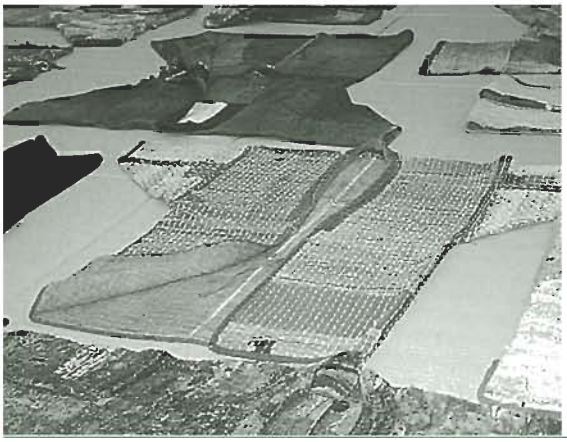
麻を水につけて皮にして……と、糸にするまでの数々の工程を詳しく説明して下さる。今の時代には考えられないほど時間と手間がかかるらしい。糸の繋ぎ方、こよりの方向等親しみと温もりがこもった方言を交えながら滑らかに動く手。

今つむいだばかりの麻糸で機織りに挑戦してみた。手と足を交互に動かしトントン…と、これが結構面白い。しかし、これが反物になるまでを思うと気が遠くなる。

こうして手間暇かけて出来た作品も展示されて居て、使い古したボロボロの野良着一枚にも物を粗末にしない心や愛着が読み取れる。

機織り体験も楽しかったが、私には何よりもおばあさん達との出会いが嬉しかった。また来年あの明るく生き生きとしたおばあさん達の笑顔に会いに行こう。

(砂山芳子／志賀町国際交流の会)



内川鎮守の森ギャラリー

機織り体験の後、いよいよ「内川鎮守の森ギャラリー」巡りに出発。あいにくの小雨模様の散策となりましたが、落葉が舞う風情あふれる豊かな自然の中、まずは"九万坊"と地元で親しまれている「黒壁山薬王寺」へ。アレッ?! 木々の間から見え隠れしているカラフルな布は何?と近づけば、野外芸術ギャラリーの作品!! 石段の脇には陶器で作られた友禅流し風の作品もあり、遊び心いっぱいの作品が、おおらかな自然の中で、それぞれに自己主張していました。

その後、よく手入れされた明るい竹林を見ながら瀬織津姫神社へ。陶芸、漆芸、ガラス工芸、染織をはじめ、花を漉いた手すき和紙や風情あるランプシェード、竹を生かした花器等、いろんな分野の作品が数多く並んでいました。展示即売もあり、作家さんとの会話も楽しみでした。向かいのテントの「いっぷくや」では、地元の主婦が作られた、きのこめし、おはぎ、ころ柿、梅干し、漬物等が格安で並んでいます。その自然派志向の素朴でなつかしい味に、豊かな内川の自然とぬくもりをしみじみと感じました。

その他、三子牛町八幡神社、蓬花町諏訪神社等にも多くの作品が展示され、地元のご年配の方々との交流もほのぼのとした雰囲気で、古き良き日本の風景に出会えたように思いました。

今回、時間の関係で参加できませんでしたが、薩摩琵琶奏者・寺本挙嶺氏をゲストに招いてのワイワイ交流塾等、10月31日から11月3日の4日間にわたる多彩なイベントでした。

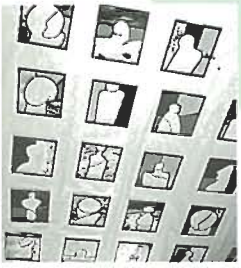
この幅広い催しは、地元のお年寄りと若者の交流や、古里再発見の場となっているようで、皆さん活き活きとしていらっしゃいました。

金沢から車で20〜30分で行ける場所とは思えないほど、内川はその自然の豊かさ、大切さ、素晴しさを実感できる里でした。そして、実行委員長の山田一二さんをはじめ、この活動に携わっていらっしゃる方々の熱意と実行力から、ふるさとを愛する想いがひしひしと伝わってくるように思いました。本当に素敵な「内川鎮守の森ギャラリー」でした。

来年の第6回が早くも楽しみになってまいりました。皆様も一度、お出かけになってみて、内川の魅力に触れてみませんか?

(林　弥子／まれびとピア懇話会)

※平成9年11月に取材しました。



「地域レポート」

AREA REPORT 2

諸岡の里おこし会

連絡先 鳳至郡門前町勝田 〒927-2142
TEL0768-43-1465(三加鉄郎)

村芝居と松明

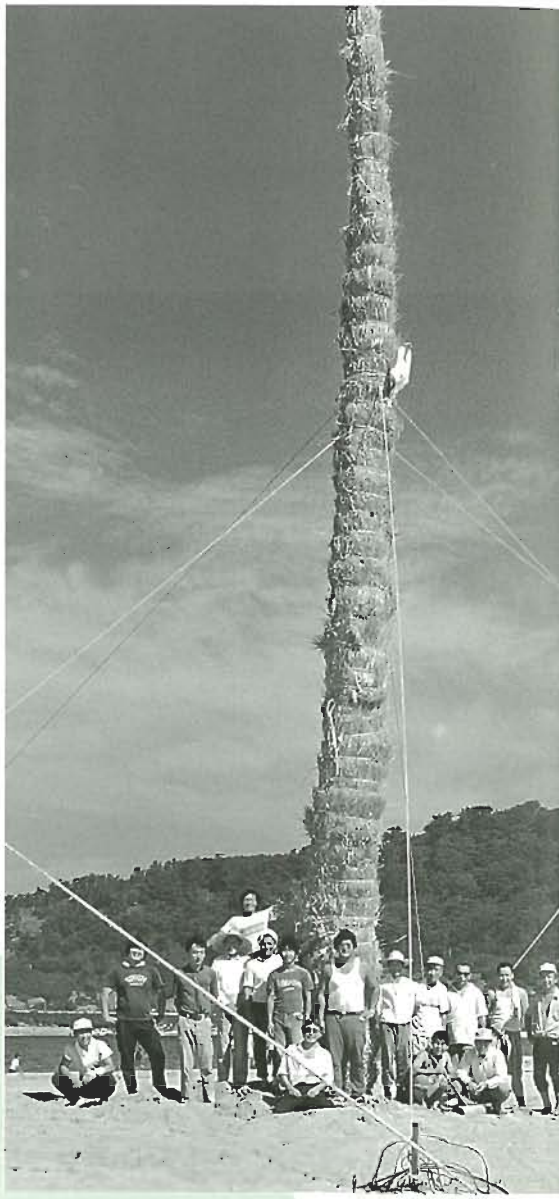
３月１日は「門前そばの市」に珠洲のフォーラムふるさと塾、穴水のはーぶどりーむ能愛、田鶴浜のふるさと21青年塾、ねあがりカライダスコープ、そして情報部会の人達におこしいただいた。ようこそ門前へ。

「門前そばの市」も８回となり、たくさんの店でヤマイモつなぎの門前そばの風味、歯ざわりを楽しむことができます。私達"じんのび悠人"はこうしたイベントには「稼ぐぞ」の意気込みで、焼そばをメインに、おでん、"ふれあい工房あぎし"のかぼちゃパウダーを使ったスープを売りました。そばはおばあちゃん達が頑張ります。

「そばの市」から諸岡の里おこし会の人達を訪ねた。「地域づくりの人が来るから集まってね」とお願いしておいたので、沢山の人で訪問できとても嬉しかった。ここの会は「今年も来ました村芝居」と銘打って演芸会を開いています。昭和25年頃まで続いていた村芝居をなんとか復活させたいという熱い思いがあったようです。これも平成４年より７回目です。

「一日、心より笑ってもらおう」の思いを込めて、涙あり、笑いあり、投げ銭のおひねりありで、とても素朴で、演じる側、見る側に感動があります。門前にいてまだ見ていないのが残念です。８月には「松明」も、昔やっていたことを子供達に伝えたいと復活させました。「諸岡の里おこし会」は自分達が楽しかったことをもう一度という想いから出発させたのです。それに地域の人達を巻き込んで、みんな元気にしています。田舎にいる者にとって、"あるべき姿"がちょっと見えたような気がしました。

今回、いろいろな所より来て下さったことで交流の大切さ、いろんな人の目が刺激となり地域を元気にしていることを実感しました。"まちづくり"の本当の意味がここにあるのかなと思います。(中野文枝／じんのび悠人)



住んでいる人が元気な・諸岡の里

諸岡の里は、門前町と合併する前は独自の村として、全国を回る旅芸人一座を幾つか生むなど、演芸に親しんできた村だったそうです。今は、学校卒業と同時に就職するために外へ子供たちが出ていくのは当り前のようになっています。

その諸岡で、Uターンで故郷に戻ってきた人や他所から移り住んで来た人たちを中心に、地域づくりの取り組みが、「松明」「村芝居」の二つの柱で行われています。Uターン組の人が、子供の頃の楽しかった思い出として、いったん途絶えていたものを現代によみがえらせたのです。

松明は、お盆に先祖の霊が間違えずに戻ってこられるように燃やされるもので、一個が10メートルもの高さになる何本ものたいまつを、小学生から大人までが総出で作ります。その話を聞いていた時に「うちの町にもありますよ」という声が加賀の人から挙がりました。かつては能登・加賀問わず普通に見られたのかも知れませんが、今は本当に少なくなっています。これを復活させた諸岡は、いつか村を離れる子供たちへ、村の伝統を強烈に伝えているのです。

帰りに今年の「村芝居」のビデオをお借りして見せていただいたのですが、本当にびっくりしました。保育園児、小学生、大人、高齢者までが次々とステージに登場し、芝居や狂言や歌やギターの弾き語りや踊りなどを次々に繰り広げます。ユーモラスなものもシリアスものもあり、演芸の層の厚さと伝統を感じました。毎年2月の第1日曜日に行うそうですが、ステージも客席も一体になって楽しんでいる姿は、いつか実際に自分もその場に立ち合いたいと思わせます。

加賀地方に住む私にとっては、能登独自の文化に触れるだけでも楽しいのですが、今回訪れた諸岡は、「外には余り知られていないけれども、住んでいる人たち自身が理屈抜きにものすごく元気な村」だと感じました。

(毎田雄一／ワークショップ IN 小松)

AREA REPORT 3

「地域レポート」

ハート・サイド・ネットワーク

連絡先■金沢市藤江北1-32-1 〒920-0345
TEL076-267-1181(須戸、中村)

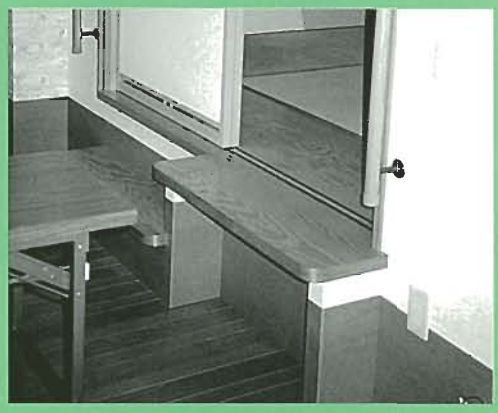
健常者にとっても暮らしやすいバリアフリー

3月27日、我々としてはちょっと異例のグループを取材してきた。自分の仕事がら、道路等の設計に近年"バリアフリー"という言葉をよく耳にし、石川県や金沢市からも"バリアフリー社会でのまちづくり整備マニュアル"なども明文化されてきている。利用者の代表である方々が自ら設計し運営されているバリアフリーモデル住宅の施設見学もできるとの案内を見て、是非利用者自らの発想や工夫を見てみたいと思い参加した。

最初に施設を案内してもらう。台所、お風呂、トイレ、洗面所などの高さが調整できたり、手すりをつけたり、操作の簡単なスイッチにすることにより利便性は随分向上し、健常者であっても老人や子供達も快適な生活ができるなあと感心しました。反面わずかな段差やスロープの折返し部分での車椅子の回転スペースの不足など、通常これくらいならとか、これくらいあればとの思い込みで処理した事により、実は全体の工夫を台なしにしてしまっているとの説明を受け、安易な妥協はだめなんだ！と今さらながらに思い知らされました。

さて、今回お邪魔した「ハート・サイド・ネットワーク」とは障害者が主体となって自分たちの生活のこと、仕事のこと、移動のことなどについて＜理想的で快適な生活＞を受け身ではなく、活動で作り出して行こうとの考えから、自主的に運営し、仲間づくりをしている会です。

便座が上下に動く、ひじかけつきのトイレ。

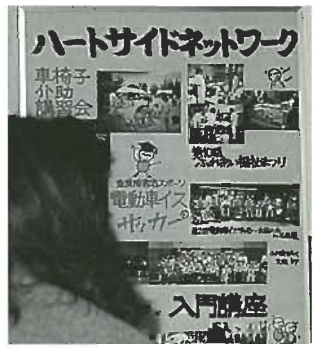


座りこんで上がりやすくしてある和室の入口。

具体的には、お訪ねしたモデル住宅の2階を常設の事務所として運営し、ここで自立出来る職業訓練のさまざまなプログラムを展開しています。イベントを通して閉じこもりがちな障害者を外へ出させて仲間づくりを進めている。将来はリフト付きのハンディバンの低料金運行を目指して行くとの事でした。

しかし、現在の日本では、外国に比べいろんな面で理解不足との話しをきいたり、今後パソコンに関する独立会社まで発展させるための、経営センス、社会福祉センスの重要性と新しい試みに対する補助金を含めた資金獲得法など、参考になるアイデアや考え方を聞き感心しきりでした。

(山田一二／内川の自然と未来をつくる会)



障害をもつ人も
自由に行動出来る社会を

「バリアフリー住宅」最近良く耳にする言葉です。その住宅に事務所を開設するハート・サイド・ネットワークの住宅見学と話しをうかがいました。

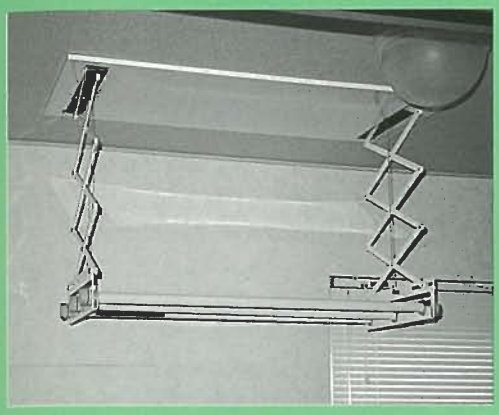
自分にはなるほど、と思える所でも障害を持つ彼等には、わずかな段差、手すりの位置等改善の余地がまだまだあるとの話。１センチ程の段差でも車椅子には妨げになることを聞き、自分を含むいわゆる健常者の無知さを反省しました。カナダやアメリカでは障害者が一人でバスや電車でコンサートに出かけたり自由に行動出来る社会になっているということを聞き、それに比べると我が国は今やっとスタート地点に立った気がします。

ともあれ遅すぎたとはいえ、彼等の生活の場が少しずつ改善されようとしています。そして、彼等が自分達の力で積極的に変えようとしている事は確かなのです。何よりもこの会は、障害を持つ人達自身で運営されていて、ここで働く職員は彼等に雇用されていると聞き驚きました。

生活、仕事、仲間作り、自立と社会参加を目指し活動している。でも、それには人とお金が必要であり資金調達のための苦労話もあるようでしたが……。この事務所は自立のための研修の場であり、人との出会いの場でもある。ここに来れば、「必ず誰かに会える」「皆がほっとする」憩の場所にもしたいと話されていました。

障害があることを一つの個性として受け入れ、日々頑張っている姿に今まで自分の心の片隅に彼等に対するかわいそうとか、気の毒、と言った考えがあった事を恥ずかしく思いました。そして、彼等が目指す「理想的で快適な生活」が当り前に成る日を一日も早く現実化する様、私達は考えていかなければいけないと強く思いました。

（砂山芳子／志賀町国際交流の会）



スイッチで上下に動かせる物干し。

ほんの少しの段差により入りづらい玄関。

交流とネットワーク

内から外へ

第8回 地域づくり団体全国研修交流会「福井大会」……1

昨年２月の静岡大会に引き続き、今回も参加させていただきました。おかげで、淡海ネットワークセンターの阿部圭宏さん、静岡政経研究所の田中孝治さん、鳥取県ジゲおこし団体連絡協議会事務局の福田京子さん、同コーディネーターの藤原一輝さんと再会することができました。また、行きの車中でワークショップ IN 小松、西尾元気の里の皆さんとも情報交換ができました。以下、大会に参加して気付いたことなどを報告します。

1.掘り下げ不足のテーマ「豊かさの中での地域づくり」

福井県は生活満足度日本一にランクされる豊かな地域なので、実際のところを福井の人たちから聞きたかったが、発言がなかったのは残念である。

全体会に福井県の人が登場しなかったのも不思議だ。福井県立大学の岡崎昌之氏がパネルディスカッションのコーディネーターをしていたが、福井代表というよりは地域づくりの研究者としての立場であったように思う。地元不在の印象が残った。

2.力強い基調講演「美しい日本の暮らし」

浜美枝氏の基調講演は素晴らしい表現力で、メッセージが心に届く、力強い内容であった。彼女が今までに訪ねた全国の町や村、そこに住む人たちのエピソードをいくつも紹介しながら、かつてはどこにでもあった「美しい日本の暮らし」を聞く者に思い起こさせた。それが彼女のイメージする「豊かさ」像である。四季の移ろいと理にかなった習慣でつくられてきた「美しい日本の暮らし」を次の世代に引き継ぐ責任がある、という主張も、農山村の廃屋を移築保存している彼女の実践活動に裏打ちされ、素直に受け入れられるものであった。食べるものを知ることが、産地への関心や交流への関心を生む、という指摘も、「酒を飲んでまちづくり」を考えている私としては、心強いものであった。彼女の講演を聞けたことが、今大会の最大の成果であった。

3.移動と歓迎セレモニーに終始した「勝山分科会」

全体の進行が演出過多のように思えた。講演やパネルディスカッションでは、メモをとるので、手元が明るくないと都合が悪いのだが、客席を暗くしたままであった。

全体会終了後に、全体の交流会がなかったのは残念であった。その日のうちに分科会会場に移動するのも無理があった。

分科会を各地の地域づくり団体が引き受けたのは、面白い試みだと思った。問題は各団体の「もてなしの質」である。勝山までわざわざ足を運ぶ理由は、決して物見遊山をしたいからではない。地元の人たちと交流したかったのだが、分科会が歓迎セレモニーと宴会に終始した。勝山市の史跡「平泉寺」の報告は面白かったが、学術的な報告を地域づくりの視点から、参加者同士で意見交換したかったが、時間切れになってしまった。

4.まとめ「地域の特殊性を普遍化する能力が、地域で求められている」

福井では情報発信力を感じられなかった。自らを語ろうとしないからだ。地域にはそれぞれの事情があるが、その特殊性に閉じこもらず、どこの地域づくりからでも参考となる情報や教訓を、自ら引きだす能力が必要であろう。それが情報発信力だと思う。

（赤須治郎／コーディネーター）

活動の輪を広げる

お隣の福井県で開かれるというので、初めて全国大会に参加させていただきました。

参加者の多さと、いろんな方面でがんばっている方がいらっしゃることに驚かされるとともに、うれしさと心強さを感じました。

身近なところで自分たちのしたいこと、できることから始めることは、容易なことでもないけれど、決して難しいことでもありません。

しかし、何を目指していくのかをしっかりと据えておかないと、手段や方策を模索していくときに、次第に焦点がぼけてしまう可能性があることも、大会の発表を聞いていて教えられました。

分散型の会場設定であった関係で、夕食を摂りながらの談議をする時間が圧縮される結果となったのは、大変残念に思いました。

その中で、住民と行政の垣根がまだまだ大きいことを感じる声が多かったのは、これからお互いに大いに考えていくべき問題だと思いました。

人と人の関係を立場を超えて理解し得る場を、それぞれの活動の中にきっちりと取り入れていくべきだと感じました。

私も、現在取り組んでいる活動の輪をもっと広めるためにも、今後ともいろいろな地域づくりの大会に参加し、参考となるものを吸収するよう努めたいと思います。ぜひ、今夏の山形大会にも参加したい。

（剱村雄一、中正　進／はりんこ塾）

朝日町の研修会

朝日町の研修会は、地元の「あさひ泰澄塾」のお世話で、町営の温泉施設を使って行われました。「あさひ泰澄塾」は、石川県にも縁の深い泰澄大師をシンボルとしながら河川美化や森林保全などの自然環境保護運動にも取り組んでいるグループで、昭和52年から活動を続けています。

研修会のテーマは「ふるさとづくり団体と行政のかかわり方」で、福井県立大学の岡崎昌之教授がコーディネーターを務めて進行されました。北は岩手から南は沖縄まで全国から集まった参加者は熱心な人たちが多く、研修会では発言が次々に続きました。

「住民と行政のパートナーシップは本当に成立するのだろうか」「行政が独占している情報をもっと公開してくれないと、住民と行政は対等になれない」「行政はすぐに平等性の原則を持ち出して住民の要望を断わるが、望むところに必要なサービスを行うのが、本当の平等ではないだろうか」「熊本県小国町では、頑張っている地域ほど、行政がより多くの支援をしている」「企業も自社の技術を社会貢献に活かせるし、活かしていくべきだ」など、活発な問題提起や意見の交換が行われました。

市民・行政・企業のパートナーシップによるまちづくりの実現へ向けて、全国で真剣な試行錯誤が行われている、その雰囲気の一端を肌で感じた研修会でした。

（毎田雄一／ワークショップ IN 小松）

交流とネットワーク

内から外へ

第8回 地域づくり団体全国研修交流会「福井大会」……2

初対面でもすぐに会話が始まる

まだ地域づくりに参加して日の浅い私は、今回初めてこのような会に出席した。全体交流会後の分科会では、一刻も無駄にすまいと、初対面でもすぐに会話が始まる皆の技と元気に驚いたが、気がつくと私もそのうちの一人になっていた。接待役のRockの方々をはじめ、参加者は真剣で話題は尽きず、交流会、夜なべ談議と時が進むにつれ、尚熱心に語り合い盛り上がる。個人主義だと思っていた若者たちも、ちゃんとした考えを持っていて、私の偏見を反省させられた。

できれば、名簿とともに各所属団体の紹介が一行あれば、更に交流しやすいのでは、とかRockと市民の関わり方や、市民にとってこの交流会はどのようなものなのか、を知りたかったが、欲張りというものだろうか。とにかく、地元の皆様のお世話で地域づくりの勉強はもちろん、楽しく貴重な体験ができ、感謝している。

（濱田みちる／西尾元気の里推進協議会）

分校を建て直す

池田町研修会へは、岩手県から宮崎県まで45名が参加。

ビデオによる池田の紹介や、町振興開発課長さんによるプレゼンテーション。地域団体の池田・夢創塾の皆さんを始め、マンデーズ、シルクの会等によるお世話があった。

振興開発課長さんの講演「中山間地における町づくり人づくり」では、人口4,200人とのこと。まちづくりのハード、ソフトをお聞きして、池田のまちづくり＝過疎対策＝町政最大のテーマと感じた。まさに池田町の池田まちづくりである。小松市の一部西尾と違って、過疎に対して敏感である。

課長さんの出身地区・水海集落での町おこしに興味。学校が無くなると地域がだめになると、分校を建て直している。さらに昨年から、少人数でも複式クラスにならない先生の配置になったとか。うらやましい限り。石川県や小松市も、地域の学校を奪うことは地域の生活をも奪うことになると、単に教育の問題でなく、行政の問題として考えて欲しい。

次に集落での営農組織化や、地区役員に定年制を設け、若い人の意見が通りやすい組織づくりを行ったりとのこと。また、自家用や贈答用に作っていた、お正月用しめ飾りの産地化に壮年団で取り組み、生産・販売しており、総売り上げで4,000万円に達するとのこと。壮年団は、受注セールスやお年寄りへの生産委託の手配、そして輸送販売を取り仕切るそうである。

夜の交流会では、能都町春蘭の里と一年ぶりにお会いした。相変わらずすごく元気。その後、「春蘭友の会」を立ち上げ、物産販売、民宿、春蘭大吟醸の製造（酒造会社へ製造委託）に取り組んでいるとのこと。だが、「あと数年で、地域の学校に就学児童がいなくなる。私たちの世代で村に住む者がいなくなる。そのためにも」と、声を荒げ訴える。

奈良黒滝村、杉皮和紙の名刺を交換。私たちも地域の皆が、プライベート、コマーシャルを分けず、こんな名刺をきっかけに交換時に自分の住む地域の紹介ができれば、と思う。

翌日は、冬の地域産物づくり体験として、池田そば道場でそば打ち・餅つき体験や木工品製造販売のモクモクハウス（町営）を見学し、池田を後にした。

（辻本嘉明／西尾元気の里推進協議会）

地域人材養成塾「塾長サミット」

２月19日、20日の両日、(財)地域活性化センター主催の「塾長サミット」が東京都内のホテルB&Gで開かれ、全国の地域づくり団体などから85人が参加した。全国の塾長と徹底討論ができることを楽しみに参加したが、自己紹介と２～３の意見を述べただけで時間切れになってしまった。「看板に偽り有り」である。この手の会議は、いつも時間切れの中途半端で終わることが多い。酒の騒がない場所で時間を気にせずに、徹底的な論議を一度やってみたいものだとつくづく思う。

塾長サミットのテーマは、分権型社会における地域住民としての責任と自覚、行政とのパートナーシップのあり方を、

①地域文化
②リサイクル社会
③行政とのパートナーシップ
④地域間交流
⑤都市計画・景観

の５つの切り口に分かれて討議した。全体的に眺めると、ポイントが絞られず、議論は噛み合わないため、各塾の活動内容を紹介する域を超えなかったのが残念である。

各分科会での討議内容の一部を紹介したい。

第１分科会　地域文化を考える

・地域の歴史や文化を考えることが大切である
・広域合併すると町の文化が希薄になる
・地域振興とは経済効果でなく、楽しく住めることだ
・まちづくりは、楽しむことだ
・経済の活性化より、心の活性化を大切にしたい
・問題点を共有化し、連帯感を高める

第２分科会　リサイクル社会を考える

・これからの町づくりのテーマは、リサイクル社会である
・行政・住民・企業の役割を明確にし、分担する
・デポジット制などを住民運動から政策提言する
・ライフスタイルを見直し、意識改革から発信する
・地域内循環こそ地方の持つ特典

第３分科会　行政とのパートナーシップを考える

・住民が主役で行政は裏方
・人材養成塾は行政がやるのではなく、NPOでやるべきだ
・行政の縦割りが弊害で、横の繋がりができればやりやすい
・住民と行政をつなぐキーマンが必要
・行政に失敗は許されないが、住民団体には許される
・住民は行政マンよりも得意な分野や専門的知識が必要

第４分科会　地域間交流を考える

・心の過疎化にストップ
・外来者こそキーマン
・インターネットの活用
・交流とは、等価価値の交換
・女性と子供たちが参画する交流

第５分科会　都市計画・景観を考える

・どんな町並みを残すかは、住民の価値水準で決まる
・保存か、住む人の生活を重視するか
・活用なくしては保存はない

‥‥以上の内容であった。

最終日には全国地域リーダー養成塾　森巌夫塾長がまとめとして、「地域づくりの切り口は多いが、突き進めば地域全体に広がるものだ」と総括し、これからの地域づくりは①地域が主役になる地域づくり②活き活きとした高齢者対策③自然との調和④高度情報化への的確な対応⑤世界の中の日本そして地域、の５つに視点を置くべきだと強調された。また、余談として、森塾の３原則「楽しくなければ塾ではない」「参加しなければ塾ではない」「進歩しなければ塾ではない」を紹介され、“塾は地域を動かす原動力”と閉め括られた。

参加した団体の意識や活動内容は様々で、新たな社会システムの構築を模索している者たちにとっては、すれ違いの議論に戸惑いを覚えると同時に、かなりの不満が残った。とはいえ、交流会を通して素敵でバイタリティ溢れる仲間に巡り会うことができ、とても感激した。

満足感よりも満腹感を味わった塾長サミットであった。

（大湯章吉／能登乃國ゆするぎ塾）

石川の地域づくり アトランダム

■七尾マリンシティ推進協議会［七尾市］
連絡先／室塚義明　TEL0767-53-8241

◆今後の活動内容

◎第13回アメリカ西海岸研修の参加者を募集しています。今年のテーマは「文化かおる商店街」で、10月中旬に計画しています。定員は20名の予定で、街づくり人づくりに意欲のある人の参加を期待しています。

◎いま、能登食祭市場は緑地整備埋立工事を行っており、駐車場が少しせまく、ご迷惑をおかけしています。春風に誘われ市内をのんびり散策し、七尾の新しい発見と出会いを楽しんでください。

■安宅まちづくり21［小松市］
連絡先／古梅　進　TEL0761-24-2181

◆活動内容

町の活性化をめざし、安宅町の住民有志が集まり活動しています。

◎桜の植樹
◎河川の清掃
◎海浜植物の保護
◎安宅町の歴史調査

毎年行っている、松林の中での桜の苗木植え。

■平家の郷構想研究会［珠洲市］
連絡先／TEL0768-87-2222（珠洲市立大谷公民館）

◆今後の活動内容

平時忠と一族の墓近くの水田で、黒米、赤米の栽培をしています。これも中山間地農業にふさわしい米づくりをと、また、時忠の時代をしのんで毎年栽培しています。黒米は「弥生米」とも呼ばれ、古くから日本で栽培されてきたとされています。収穫された米は、イベント「鯉のぼりフェスティバル」、11月の文化祭に試食していただきます。

■フォーラムふるさと塾［珠洲市］
連絡先／竹田妙子　TEL0768-82-4254

◆今後の活動内容

◎カラーの植栽。
◎狼煙の活性化を支援する。
◎8月上旬に、
　第2回『ふるさとコンサート』を開催。

地元アマチュアバンドの演奏ですが、助っ人として「ぜひとも出演したい」というグループがありましたら、どうぞおいでください。（もちろんボランティアです）

■ふるさと21青年塾［田鶴浜町］
連絡先／塾長　西本哲郎　TEL0767-68-3495

◆活動内容

◎座禅会（5月・10月）
田鶴浜建具発祥の地「東嶺寺」で座禅会を開催します。

◎夢マップ実現化
21世紀の田鶴浜町の夢を描いた、夢マップ立体模型を作成しています。今後は、これを基に町民フォーラム等を開催する予定です。

◎塾報「クレインズ」発行
今年から、活動のPRとまちづくりを気軽に語り合う目的で塾報を発行します。皆さんのご意見をお待ちしています。

■小松中心商店街　Ms.の会［小松市］
連絡先／TEL0761-21-2226

◆活動内容

愛する人に贈る『短歌・俳句・一筆啓上』展を平成9年7月7日～8月3日に開催。小松市内の小中高等学校に短冊を持参し、その後回収しに行きました。小学校は5、6年生のみとしましたが、全部で1,800点の作品が集まり、文学関係の先生方に優秀作品を選んでいただきました。期間中は、全作品をパネルにして展示しました。平成10年も七夕の頃に開催する予定です。

全作品を短歌・俳句・一筆啓上に分類するだけで、朝から4時頃までかかり、優秀作品選びは夜になりました。

■ワークショップ IN 小松［小松市］
連絡先／毎田雄一　TEL0761-21-1014（コマニーCD研究室）

◆活動内容

3月7日～8日の2日間、大阪市西成区で「まちづくりサミットin NISHINARI」が行われ、大勢の地元住民、行政、他府県からの参加者が集まりました。
私たちは、研究集会での事例発表や、ワークショップのお手伝いをしました。

■まれびとピア懇話会［加賀市］
連絡先／林　弥子（やすこ）　TEL07617-23-1865

◆今後の活動内容

◎春の妖怪講座「よみがえるもののけ」を開催。

日時：6月13日（土）18:00～　会費：2,000円
会場：うるし蔵 加賀市永井町43-41 TEL07617-3-8116

ゲストは小松和彦氏（国際日本文化研究センター教授）。異人、妖怪、鬼などの研究を続ける民俗学者。「もののけ姫」がなぜヒットするのか。"もののけ"や"まれびと"の現代的魅力を探ります。

編集後記

マスコミでは環境ホルモンのことが盛んに話題になっています。私どもの子孫に、よりましな環境と可能性を残してゆくためには、私達の暮らしを変えていかねばならないとの警告でしょう。地域から新しいライフスタイルを実践してゆくこと、それが地域づくりの大きなテーマのように思われます。（高峰）

石川県地域づくり推進協議会 情報誌
「My Page」Vol.2 1998年3月発行

●発行
石川県地域づくり推進協議会
金沢市広坂2-1-1 〒920-8580
石川県総務部地方課
TEL076-223-9058 FAX076-223-9486

●編集
石川県地域づくり推進協議会 情報部会